

<展望(文学界)>川端康成と大江健三郎

カツマタ, ヒロシ / 勝又, 浩

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

53

(開始ページ / Start Page)

52

(終了ページ / End Page)

53

(発行年 / Year)

1996-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019860>

川端康成と大江健三郎

勝 又 浩

と、並べれば言うまでもなく、今のところ日本ではただ二人のノーベル文学賞受賞者。ノーベル賞の審査員が何を考えて日本からこの二人を選んだのか知るよしもないが、結果としては彼らはなかなかアジなことをやっている。日本文学において、この二人はいろいろな意味で全く対照的な存在なのだから。

川端康成がノーベル文学賞に選ばれたと知ったとき、あの『雪国』や『山の音』、『千羽鶴』や『眠れる美女』のような世界が西洋人に本当に分かるだろうか、という疑問をいう人が多かった。が、もとよりこんな議論に大した意味はない。こういう単純な民族主義者は何時でも何処にでもいるもので、たとえば、外国の源氏物語学者などと聞くとテンから信用しない日本人がいるように、日本のシェックスピア学者や翻訳家だと聞けば鼻の先で笑う英国人もいるのだという。しかし、源氏物語を本当に分かっている日本人はいないじゃないかと、その昔、本居宣長も言ったのだ。西洋人に川端文学が分かるかと言ったその日本人だって、川端文学が分かるという保証はない。だが、その分からないかも知れぬ彼にだって、川端文学を愛し、楽しむ権利はあるし、誰もそれを禁ずることはできない。同様に、我々はシェックスピアでもギリシャ神話でも勝手に楽しめばよいし、西洋人もまた源氏物語でも芭蕉でも自由に誤解すればよいのである。

人気に比例した大きな誤解の渦の中を生きてきた川端康成は、それ故、ノーベル文学賞などは一種の美人投票みたいなものですからと言ってスウェーデンまで出かける余裕を持ち得たのではないだろうか。言い換えれば、分かるの分からないのと子供じみた議論などしない、西欧世界が自分および自分の国にエキゾチック・ジャパン

のエキゾチック・ノベルを求め、また認めただのだから、それに素直に応えておけば良いとしたのであろう。紋付き、羽織袴の正装で、『美しい日本の私』ですと、外国の日本文学研究者も誤訳を出し、日本国民さえ辞書を引かなくては分からないような講演をしてのけた川端康成の姿勢には、そういうものが感じられる。

こういう川端康成に比べると、タキシードに身を固め、自前の英語英文で『あいまいな日本の私』だと受賞講演をした大江健三郎は、みごとに対照的だった。彼が先輩受賞者を大いに意識し、可能な限りそこから遠いところに自分を位置付けたいと望んだであろうことは想像できるし、また同情もしたいが、それにしてもやはり、二度目はパロディーの感が拭い難かったのは、巡り合わせとはいえお気の毒なことであつた。

中村真一郎が新聞紙上で、「あいまいな日本」などということばが「流行る」そうだが、そんなのは日本の「複雑で」「多元的」、高度な文明への無知、「伝統から切り離された植民地的心情の怠慢」だろうと腕曲たじなに窘めていたが、当然そういう意見も出ることであろう。そして議論をするとなれば、そう簡単に決着の付くことではない。ただはつきりしているのは、日本を「あいまい」な国だと言うとき、その人の判断基準が決して日本にはないということだ。そしてこれは、それ自体で完結してしまっている『美しい日本の私』——他からの比較や批評など入り込む余地のない、知らなければ自分でお調べなさいと言うがごとき——川端康成の自己規定とは全く対照的なのである。

私は一読者として、大江健三郎という作家の、物ごとを常に自己否定的に受け止め、考えて行く、その謙虚さも誠実さも勤勉さも、決して疑う者でも、敬意を持たぬ者でもない。しかし、『あいまいな日本の私』は何かが違っている。——その昔、日本には誇るべき文化など何もないと言ってケーベル博士を驚かせ、悲しませた謙虚で誠実で勤勉な帝国大学の学生たち。習い覚えた西洋的基準でものを考え、憧れ見る西洋の価値観で日本の国を見る、そうして、その基準に及ばない日本を嘆き、自分を恥じ入ったりする、そういう日本近代の悲しい知識人の一タイプ——私は大江健三郎に、こんな方向で日本を代表してもらいたくはなかつた。

昭和四十三年、東京オリンピックから四年、三島由紀夫が割腹自殺する二年前、そんな時代、ノーベル賞審査員たちはエキゾチック・ジャパンを代表する一人の作家に花を贈って世界に紹介した。それから二十六年、今や世界中が注視する経済大国日本、今度は、その美においても思想においても、日本の美点など決して主張も自慢もしない、至って物分かりのよい「植民地的」優等生作家を彼らは選んだ。これはノーベル賞審査員たちの洒落なのか謀略なのか。

(かつまた ひろし・文学部教授)